

砂丘ラッキョウ概史

藤井嘉儀*

昭和59年7月31日受付

Brief History of Baker's Garlic in a Chief Producing District, Fukube Village

Yoshinori FUJII*

According to classical literatures, the introduction or propagation of Baker's Garlic to Tottori prefecture presumably dates back to the Edo era. As for the Fukube district, one of the famous sand dune areas for successful agricultural use, its cultivation has already been initiated from the second half of the Meiji era. For the first time two villages, Amoh and Hosogawa in Fukube, became capable to provide a shipment of produce outside Tottori e.g. Kyoto, with the gradual increase of production. In 1952 after World War II, a part of the state-owned sand dune fields were disposed of to Fukube farmers by the Japanese Government, and hence an area of 100ha has been developed for 30 years in order to open new fields suitable for cultivation of Baker's Garlic.

A factor of locality formation might be caused by the principle of relative advantageousness and the economies of concentration. Concurrently more emphasis should be placed on the strenuous will of farmers in seeking the creative new technologies for better farming practices. Therefore, it can be verified that the theory of locality formation is based on the so-called theory of innovation.

緒 言

鳥取県は中国山脈と日本海に挟まれた東西に長い地形であり、海岸線は約170kmに及んでいる。

その海岸線のいたるところに大小さまざまな砂丘が発達しているが、これらの砂丘は河川によって上流から運ばれた流砂や、沿岸部の浸蝕によって生じた漂砂が、波浪によって汀線に打ち上げられ堆積してできたものである。

したがって、砂丘地はいずれも中国山脈から下る河川の河口附近に発達している。

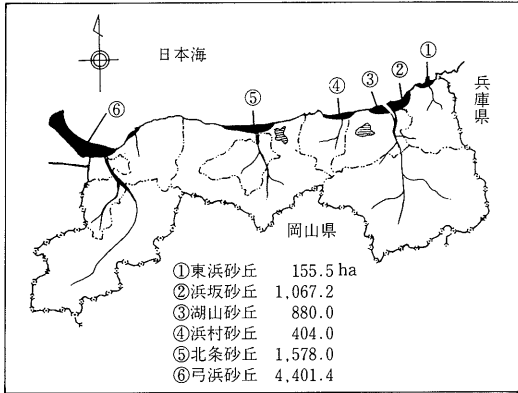
鳥取県の砂丘地面積は8,486haに上るが、このうち約50%は砂丘畑として利用されていると推定される。

第1図に県下の砂丘地の分布を示すが、大きく区分して千代川流域を中心とする東部砂丘地帯、天神川河口を中心とする中部砂丘地帯及び日野川河口に発達した西部砂丘地帯となる。

鳥取県の砂丘開発は、一般に西部から東部へと展開していくが、これは砂丘地形の相違と季節風の強度（もつともこの季節風の強度などによって地形の異なる砂丘が形成されるのであるが）による開拓の難易性に基づくものである。

* 鳥取大学農学部農業経営学科農場管理学研究室

* *Department of Farm Economics, Faculty of Agriculture, Tottori University*



第1図 鳥取県砂丘地分布図

西部の弓浜砂丘は、平坦なこともあって古くから農地として利用されている。記録によれば天正年間（1573—1591）に開拓の畝が入ったとされ¹⁴⁾、他地域の先達となった。

中部・北条砂丘の開発は1860年前後から活発化し、東部砂丘地帯の開拓は明治に入り、かなり後のことである。

東部に鳥取砂丘の名が見あたらないが、これは浜坂砂丘の部分通称であり、浜坂砂丘は現在3区画に分割され西から浜坂砂丘、鳥取砂丘及び福部砂丘の通称で呼ばれている。

砂丘地におけるラッキョウ栽培は、東部福部砂丘を中核として北条砂丘、東浜砂丘、弓浜砂丘、浜村砂丘及び浜坂砂丘などに見られるが、福部砂丘と北条砂丘以外は極めて小規模である。

ラッキョウは中国の古農書齊民要術、農政全書を経てわが国の農業全書にいうように、白砂地を最良の耕地とするとされ、たしかに砂畑ではあざやかな白色とよくしまった肉質のラッキョウが生産出来る。

鳥取県へのラッキョウ伝播については後に詳述するが、江戸時代であったと考えられ、栽培状況は明治42年以後の統計記録以外には把握できない。

なお、明治42年から昭和11年までの収穫量は石単位で表されているが、これはおそらく塩漬ラッキョウとしての容量を示すものと考えられ、現在塩漬ラッキョウ4斗樽が45kg入りであるところから換算し、1石約115kgとして表示したものが第1表である。

このように第2次世界大戦後急激に拡大したラッキョウ栽培であるが、それはすべて砂丘地の開拓に基づく成長である。

第1表 鳥取県ラッキョウ生産の推塩

年次	作付面積ha	収穫量t	年次	作付面積	収穫量
明治 42	17.4	129	昭和 40	140	1,570
43	19.4	80	41	131	1,180
44	25.4	94	42	150	1,210
45	28.7	93	43	162	1,470
大正 2	31.3	95	44	170	1,730
3	34.2	110	45	178	2,150
4	38.2	102	46	181	2,100
5	40.9	131	47	177	1,860
6	40.2	121	48	210	3,070
7	44.9	116	49	242	3,280
8	41.5	125	50	236	3,280
9	40.0	97	51	239	3,550
10	39.4	104	52	263	3,390
11	39.2	108	53	270	4,070
12	38.1	102	54	292	4,580
13	51.1	119	55	303	4,660
14	45.5	130	56	298	3,810
15	44.2	109			
昭和 2	50.6	129			
3	65.6	176			
4	63.2	165			
5	63.2	170			
6	63.7	137			
7	71.0	160			
8	72.9	159			
9	75.8	165			
10	79.5	180			
11	84.7	189			

鳥取県統計書及び
鳥取県統計年鑑よ
り作成

※昭和12年～39年 統計欠
※昭和11年までの作付面積 町=ha で換算
収穫量 石=115kg

本報告は、東部の代表的ラッキョウ産地であると共に、県下最大の産地である福部砂丘地域におけるラッキョウの産地展開を跡付けようとするものである。

福部砂丘へのラッキョウ伝播については、次の3説があげられている。

- ①江戸時代の参勤交代に伴って伝播¹²⁾
- ②江戸時代に伊勢参りの村人が持ち帰り¹⁾
- ③江戸末期朝鮮半島から渡来⁴⁾

いずれも根拠とする資料はなく、言い伝えられている程度のものであるが、それぞれ極めて興味深い説である。

①説は別報²⁾で述べたごとく、わが国におけるラッキョウの伝播が北九州を起点として江戸へ上り、江戸文化

を伴って各地に伝播したものと推定した筆者の仮説を満足するに好都合な説である。

だが、②説もラッキョウ呼称の分布を見ると、伊勢地方に九州地方の「ランキョ」圏の影響が残っており、鳥取にもそれが認められていることから、この説の可能性も否定出来ない。

③説は漂着した朝鮮人による伝来との事であるが、資料はまったくないもの大陸からの伝播経路を考える上では、極めて魅力のある説である。

これら3説のいずれが正しいのか判断できないが、どの説も江戸時代に伝播したことを指しており、平田眠翁¹¹⁾が江戸時代末期の鳥取県産物の1つにラッキョウをあげていることから、おそらく本県へのラッキョウ伝播は江戸時代であったと考えられる。

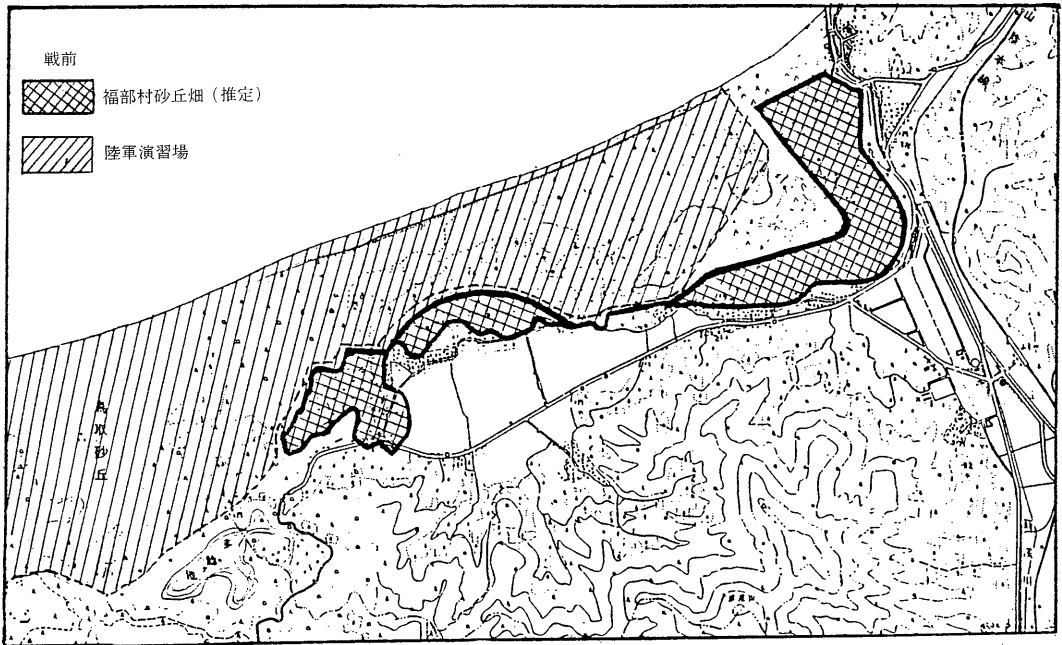
鳥取県におけるラッキョウ生産はすべて砂丘地で行われているが、砂畑は極めて優れた品質のラッキョウ産出適地として知られている。

ラッキョウは、その大部分がいわゆる酢漬けとして利用されている。しかし、近年シャロットの代用品としてラッキョウ未熟球の生食が伸びており、市場ではエシャロットと称されている。

産地においては、当然これら利用形態に応じた出荷がなされているのであるが、ラッキョウの加工自体が極めて素朴なものであることから、その出荷形態は概ね3通りがある。

まず、最も一般的な形態は無加工出荷である。掘り取ったラッキョウは根毛と葉が大部分を占め、可食部の鱗茎は極めて1部である。したがって、無加工といえども不用な根毛と茎葉は切除しているが、これを土付きラッキョウ又は荒ラッキョウと呼ぶ。

次いで不可食部分をまったく切除し、鱗茎のみを洗浄して、あとは好みの調味液に漬ければよい形態にした洗いラッキョウと称する出荷形態がある。根冠を含む根毛部と茎首部から先を切除した太鼓型の1次加工品であ



第2図 昭和27年国有地払下以前の福部砂丘の耕地

るが、この形態は少々厄介な問題を持つ。

ラッキョウは極めて生命力が強く、たとえ洗いラッキョウの形態に切断加工されていても数時間たつと芯部が成長し、芽を伸ばしてくるのである。この発芽現象がせ

つかくの1次加工の製品を台無しにして、商品価値の低落を招くのである。現在では、塩水や酢酸液を用いて芽止め処理が施されているが、かつてその方法をしらなかった時代にはこの発芽がネックとなっていた。

したがって、切断加工したラッキョウを塩漬けにして樽詰め出荷する出荷形態があったのである。これは、調味加工する時に水漬けにして塩抜きして用いることから加工業者などには適したものの、家庭における加工には不便であった。

以上の3形態は現在も行われているが、それぞれ産地により特色ある出荷形態がとられている。

例えば、土付きラッキョウは近年成長の著しい鹿児島・宮崎などの出荷形態であり、洗いラッキョウは地場産地などの零細な出荷がわずかに見られるものの、鳥取・高知・徳島の3産地の代表的出荷形態である。

塩漬けラッキョウの出荷形態は現在ほとんど見られないが、福井においては塩漬貯蔵し、通年調味加工をした製品を出荷する農村工業型の生産を主体としている。

鳥取県におけるラッキョウ生産は、東部福部砂丘を中心に展開しているが、福部砂丘地帯の出荷形態の代表的なものは洗いラッキョウであり、現在当地域産出の80~90%を占め、県産ラッキョウの64%を供給している。

福部砂丘の開拓とラッキョウ

福部砂丘地域における農地の開拓は、かつて当地域に存在した湯山池と細川池の干拓から始まった。細川池は1700年代半ばに、湯山池は1860年頃に干拓され、水田となった。しかし、湯山池干拓は軟弱地盤ゆえに困難を極め、しばしば地盤沈下を生じ水没しており、水田として安定化したのは昭和27年である。したがって、明治・大正期の記録には未だ湯山池が残っていることがある。

例えば、大正5年頃の記録(服部村郷土史)¹⁰)にも湯山池が残っており、エビ、フナ、ボラ、などを副食用に利用したことが記され、当砂丘地域の水田面積は約130haとされている。

かつて、安政6年(1859)の記録によれば、湯山池の面積はおおよそ40haあったようであり、その干拓により水田化された部分があるわけであるから、大正時代の湯山池はおそらく20ha位の面積であったろう。

明治時代の砂丘地域は極めて劣悪な農業環境にあったことが想像でき、例えば当時の農業の要であった水田は前述のごとく2つの池の干拓を含め、極めて低湿な劣等地で冠水常襲地帯であった。これは各種の水田基盤整備を施した現在でさえ、逃れることのできない当地域の宿命でもある。

また、村の背向地の福部砂丘はまったく自然状態の裸地であり、北西からの季節風による飛砂は生活においても農業にとっても少なからぬ影響を及ぼした。

砂丘の飛砂は、時として想像を絶する被害を生じ、地域によっては一夜にして人家を半没した話も聞き、事実昭和20年代でさえ半ば埋没した空屋を見かけたものである。

福部砂丘は、いわゆる古砂丘が核をなす安定的状態にあることから、新砂丘周辺の地域と比べまだ影響は少ない方であったが、少なくとも地域住民の味方ではあり得なかった。

明治も進むにつれて地域の人口・戸数も増加し、同時に自給的経済から貨幣経済に急速に転換する中で、当地域の限りある狭隘な水田のみではムラの維持さえも困難となってくる。ちなみに明治5年(1872)の当地域戸数は、漁村の岩戸を含めて280戸あり、現在の300戸とほとんど差がない。したがって、単純平均では1戸当たり水田面積は45aほどにしかならず、しかも低湿の極めて生産力の低い耕地なのである。

耕地条件は、生産技術の低い段階においてはさきほど生産力の差を生じないであろうが、いわゆる明治農法の展開に基づく水稲生産技術の高度化に伴って、水田の優劣条件の較差は著しく拡大し、当地域の現在の生産力も他の水田地帯に比して、かなり低位にとどまっている。

農業生産力拡大の願望は、当然ムラの背向に広がる砂丘地の利用を促し、明治にはすでに集落に近い低地においては耕作が行なわれていた。

砂丘地といえども低地部は地下水位も高く、例えば観光砂丘でスリバチと称されている凹地は、かつては泉水が湧き植物が自生している位であるから、当地域の低地砂丘畑は当然作物栽培が可能で、明治中期には約10haの砂丘畑があった。

だが、福部砂丘の本格的農地開発は県内の他の砂丘地域に較べて比較的遅い。これは当砂丘が他地域の砂丘と異なり、かなり高い丘陵をなし全体的に地下水が低く、乾燥が著しいためであった。

例えば、鳥取砂丘の西側に千代川を境に広がる湖山砂丘や、県中部の北条砂丘などは、平坦な地形で地下水位も高いため、浜井戸と称する素掘りの井戸(約2m深)により灌漑用水を得ることができたことから、かなり早くに開拓の鍬が入ったが、福部砂丘は明治35年(1902)佐々木甚蔵によって先鞭がつけられるまでは不毛の地として君臨していた。

しかし、佐々木の開発場所は福部砂丘とはいえず、山裾から砂丘に向かって伸びる比較的土質に恵まれた丘陵地であり、まったくの砂丘地ではなかった。

彼は目標を果樹栽培に置き、モモ、ナシの導入を試み、

結果として山裾の土質の良い畑地はその栽培に成功したが、いわゆる砂丘側では果樹を受けつけず、その後桑が植えられている。

だが一部ではあれ砂丘地の農地開発に成功を修めたことは、その後の砂丘地開拓に大きく貢献するのである。

福部砂丘の開発がその後も他地域に比して進展しなかったのは自然的条件のみでなく、明治29年に鳥取市に設置された陸軍40連隊の演習地として使用されていたことにも原因がある。

浜坂砂丘と称されるのは、福部砂丘と鳥取砂丘を含む約1,000haであるが、このほとんどが軍用地とされ、住民の耕作は許さなかったのである。

したがって、明治末期の福部砂丘地域の砂丘畑は砂丘地周縁部のみに限られ、モモ、桑などに混って細々とラッキョウが栽培され、自家用の残りを鳥取市の朝市や問屋に出していた程度であったという。

鳥取県統計書によると、明治42年の県内ラッキョウ栽培面積は17.4haであり、おそらく大部分が自家用栽培であったことと考えられる。

福部村におけるラッキョウ栽培の記録は、大正3年(1914)に細川集落(以後集落は省略)の浜本四方蔵(1871-1950)が0.5haの砂丘畑でラッキョウ栽培に成功したのが最初とされる。しかし、大正5年頃の服部村郷土史によると当時の産物中に「薤」があり、収量が225石となっている。重量換算は困難であるが、当時の鳥取県の収量が10a当2.8石とあることから、推計すると約8haとなる。

もし浜本がまったくの先駆者であるならば、わずか2~3年で8haにまで栽培面積が拡大することは不可能であろう。同記録によると瓜類・マユ・ラッキョウ・果実は近村にその比を見ざる盛況としていること、またラッキョウの販売高が全農産物販売額中2.7%を占め、果実販売高の1/2をあげていることなどから、とても3年程度での成長量とは考えられない。

したがって、浜本はそれまで利用されていなかった砂丘地に、当時としては進歩的な大規模商品栽培に成功したと考えるのが妥当であって、既述したように当地域においてはすでに自給的なラッキョウ栽培が行われており、それら農家が浜本の成功をみて商品生産へと栽培を拡大していったものに違いない。

浜本四方蔵は若くして北海道に移住した。

鳥取県における北海道への民間移住は、明治12年(1879)鳥取市の士族5名が先鞭をつけ、明治17年(1884)に36戸・175人が賀露港を出航し、釧路に向けて以来つぎ

つぎ移住している。

前述の湯山池干拓を手がけ、その難事業に私財を使い果たした宿院六平太義般も、官職を得て北海道に渡ったが、その息子2家族もこの明治17年の移住に加わった様子であり、浜本もこれら先達の影響を受けたものであろう。

賀露港は鳥取県東部の千代川河口の漁港で福部村(当時の服部村など)とは目と鼻の先の距離であり、浜本もこの港から出航したのである。この賀露港から釧路への航路は極めて重大な意味を持つのである。

当時この航路は賀露港から能登港を経て釧路に向っていた。彼は子供の教育環境の問題で帰郷を決意したのであるが、おそらくこの航路を再びたどって帰郷したに違いない。

その途中、彼は能登のどこかで砂畑に大規模に栽培されたラッキョウを見たのではなかったか。

大正3年に彼が砂丘で栽培に成功したとされる0.5haのラッキョウの種球は、実に石川県から入手しているのである。

文明開化の時代とはいえ、情報の入手はさほど容易ではなかったと考えられ、まして一般的でない情報はおそらく自ら体得する以外には難しかったことであろう。

例えば福井県のラッキョウ産地の展開⁸⁾は、三国地方の浜四郷村住民の村上七之助が大正6~8年・神戸に出していた折、知り合った神戸湊川市場の商店主に依頼され、三国地方のラッキョウを集め出荷したのが、同地方の産地形成の契機をなしたとされるように、体験的に情報を入手しているのである。

浜本が福部砂丘において当時としては大規模なラッキョウ栽培を試みた契機は、おそらくこの航海の体験によるものであろうと推察されるのである。

彼は帰航の途中、能登のどこかでラッキョウ栽培現場を見たのに違いない。そして大正元年(1912)国鉄山陰本線が開通し輸送路が確保されるといちはやく石川県にラッキョウ種球を求めたものであろう。

もちろん当時すでに自給的なラッキョウ栽培は行われていたのであるが、とても大量の種球を得られる状態ではなかったであろうし、あるいは品質的な問題があったのかもしれない。

浜本は帰郷後、生家のある海士には住まず、隣接する細川に茶屋を開業し、生計をたてている。移住する時家督を他に譲り、農地は手離した訳であり、帰郷後も農地が入手できたとは考えられない。おそらく農地に対する意識は人一倍強かったであろうが、この狭隘な地域には

もはや入手可能な農地はなかったに違いない。

ただ、誰もが農用地として考えもしなかった不毛の砂丘地のみが残されていた土地であったと推察される。

すでに述べたごとく、砂丘地といえども低地の地下水位の高い場所は作物も育ち、古くから耕地として利用されており、自給用のラッキョウも栽培されていた。

だが浜本は、誰もが手をつけかねていた高台の部分にラッキョウ栽培を試みたものと考えられる。それが大正3年の砂丘地におけるラッキョウ栽培の成功として記録されたものであろう。

その後、彼は佐々木甚蔵（前出）らと計り、零細農家に働きかけて砂丘畑の開拓に乗り出している。大正6年から昭和元年に至る開拓事業で、約15haの砂丘畑を造成し、桑・ラッキョウを植え付けた。

このように浜本は、ラッキョウの商品的生産を目論んだ先駆者であることは確かで、当地域のラッキョウ産地の形成に大きい役割を果たしたのである。

いまひとつの彼の功績は市場開拓である。大正6年、彼はラッキョウ栽培農家に働きかけて、産業組合法によるラッキョウの販売組織を結成し、関西市場へのラッキョウの共同販売を行っている。

これに先立ち、彼は自家生産したラッキョウを塩漬樽詰にして京都市場に出荷しているが、おそらくこれが好結果であったに違いない。その後、彼は地域のラッキョウ生産農家のラッキョウを集め、県外市場へ販売する産地仲買農家へと成長していくのである。

産業組合の設立も、商人の介入を防御し、自己のテリトリーを守るための方策ではなかったか。

浜本らのラッキョウ生産の好結果に刺激されて、隣接の海士にも栽培農家が増加し、大正5年頃には約8haに拡大していたから、当然商人の介入をみることになる。

古老の話によると、商人の中には庭先取引したラッキョウをその場で人夫に根切りさせ、塩漬樽詰にして持ち帰る者もいたといひ、これら商人の参入を排除すると

共に自己の勢力を拡大するには、公的性格を看板とする産業組合を組織することが手取り早い方法であったといえる。したがって、結成された産業組合はおそらく浜本の独裁的組織であったと考えられる。

しかし、これは強ち非難されることではない。このような事例は各地に散見されるごく普通のことであり、当時の一般商人の搾取状況から考えると、むしろ農民にとっても有利な事が多かったのである。

同様の事例はその後当地域にラッキョウ栽培が普及拡大するにつれて生じている。

大正9年には寺谷純¹³⁾が海士のラッキョウ仲買をしていて、生産者に対して栽培講習会などを開くと共に、農家を組織化して栽培面積の拡大を計ったとされているが、おそらく彼も自己の利益拡大を目標としたに違いあるまい。

また大正11年には海士において、井手野千代治⁷⁾を中心とする海士産栽培販売者出荷組合が産業組合法に基づいて設立されているが、おそらくこの組織も地主で産地仲買農家であった井手野の独占的組織として誕生したものであったろう。

これらの組合はラッキョウ出荷期になると、いずれも掘立小屋を建て、周辺農家から人夫を雇用して根切りをさせ、塩漬樽詰にして出荷していた。だが、ラッキョウは決して順調に伸びてきた訳ではない。

明治末期から成長し始めていた養蚕は、昭和7年頃の頂点に向って当地域の砂丘畑を桑で埋めつくしていったのである。桑は比較的乾燥に強いものの、やはり低地砂丘畑などから占領し始め、ラッキョウは縮少されるか又は極めて条件の悪い圃場に追いやられたものと推測できる。ちなみにラッキョウ栽培については、昭和7年の塩見駅（現在の福部駅）の記録⁸⁾によると海士27ha、細川12ha、岩戸3haの合計42haの面積があり、130t出荷されたとある。だが、前年昭和6年の村勢一覧によると栽培面積26ha、生産量702石とあることから、翌年に42

第2表 農産物生産の変化

(村勢一覧)

	昭和6年度			昭和15年度		
	面積ha	生産額円	%	面積ha	生産額円	%
米	334.8	127,860	(53.9)	331.4	282,644	(43.9)
果実	25.5	26,233	(11.1)	61.8	67,875	(10.5)
ラッキョウ	26.0	10,530	(4.4)	20.0	60,000	(9.3)
マユ	—	43,714	(18.4)	—	35,403	(5.5)
総農産額		237,353	(100.0)		644,201	(100.0)

ha も面積が増大することは考えられず、栽培面積は疑問であるが、出荷量の130 t は貨車輸送の実績ではなかろうか。

第2表に昭和6年と15年の福部村農業生産概要を示すが、10年の間隔があるため必ずしも正確な変化を説明出来ないものの、ラッキョウ栽培面積は減少している。一方マユ生産額の比重は著しく低落し、養蚕の衰退の激しさがわかる。

果実は面積の伸びは著しいものの、生産額比率はむしろ低下しており、價格的に不利な状況にあることがわかる。

ラッキョウは栽培面積の減少にもかかわらず、生産額比率は著しく上昇している。実質単価の上昇によるものであろうが単価の比較資料がなく、いま仮にコメの生産額を基準に対比してみよう。

コメの生産量及び栽培面積がさほど変化してないことから、当該年度のコメ生産額を100とするラッキョウの生産額指数を算出すると、昭和6年8.2であったものが昭和15年には21.2に上昇している。ラッキョウ面積が6 ha 減少しているから、その比率で補正すると実質指数は27.6となり、極めて價格有利な作物となっている。

第2次大戦の勃発は、砂丘畑作物の様相を一変した。戦局が厳しくなるにつれて食料増産のため桑が掘り起こされ、ムギ、サツマイモなどが植付けられていった。当然、ラッキョウ畑も転作を余義なくされたであろうが、食料としての作物の作付が不可能な条件の圃場のラッキョウは生き伸びることが出来たのである。その相対的有利性の低さから、最劣等地に追いやられていたことが結果的に幸し、前述の2つのラッキョウ販売組織が昭和18年に農業会に改組され消滅してしまったにもかかわらず、終戦後の復興期まで細々とではあったが栽培が続けられたのであり、それが今日の産地形成の母胎をなしたのである。

砂丘地の解放と開拓

砂丘ラッキョウの銘柄は、現在鳥取産ラッキョウの総称となっているが、当初は福部砂丘産のラッキョウの商標であった。

福部砂丘地域における洗いラッキョウの生産販売は古く明治にさかのぼり、砂丘地域の農家が自給的生産の残余を鳥取市の朝市や問屋に細々と販売していた当時から続いている。

大正に入り、栽培が増加するにつれて鳥取市場が飽和し、商人が介入し始める頃になると、折からの鉄道輸送

の開始に伴って県外への移出が試みられ始めたのである。

最初は大阪地方の市場に、洗いラッキョウ（当時は芽止め処理など施さないまったくの生ラッキョウであった）を出荷したらしいが、輸送時間がかかり過ぎ、途中で品質劣化を生じて商品とならなかったという。

したがって、大正6年頃からの関西市場向け出荷は塩漬・樽詰による輸送となり、この出荷形態はかなり長年にわたって続けられていた。

だが満州事変（1931—1932）の頃から、大阪市場で家庭での加工用としての洗いラッキョウの要請が強まり、徐々に洗いラッキョウへ切り変っていく。当初は芽止め処理などまったくしない洗いラッキョウであったから、輸送中に発芽し商品価値を著しく損ねたが、なす術を知らず極めて不利な出荷を続けていた。

福部村勢一覧によると、昭和6年のラッキョウ生産販売量は702石、10,530円とあり、農産物総販売額の4.4%を占めるに過ぎなかったものが、昭和15年には10,000貫、60,000円となり、9.3%の比重に上昇している。

この間の単価の推移は算出比較が困難だが、コメの販売額との比較の変化で見ると、昭和6年にコメ販売額を100とするとラッキョウ8.2であったものが、昭和15年にはラッキョウは実質27.6に上昇していることから、この間のラッキョウ價格の有利な状況がわかるが、このラッキョウ単価の上昇はおそらく商品形態の変換に基づく要因も大きくかかっていると考えられる。

しかし、昭和7年をピークとする養蚕の発展はラッキョウ畑の桑への転換を促し、昭和15年には栽培面積の減少をみる。養蚕ブームは昭和7年以降は急速に冷却していることから、当然桑畑の他作物への転換が考えられる筈であるが、折からの果実ブームによりモモにとって代わられ、ラッキョウ栽培面積は減少したままで伸びなかったものである。

第2次大戦後の勃発とその後の影響はすでに述べたが、大戦終了後も経済状態は戦時中とあまり変わらない状態が続き、農業生産は食料供給を必至とした。

大戦中に転作したイモ畑・ムギ畑にはそのままイモ・ムギが継続されており、昭和20年代の半ばまでそれらの供出が行われており、この頃のラッキョウ状況は数値として残されていないものの、食料生産不能な悪条件の砂丘畑で栽培が続けられていた。

だが、かつての出荷組織は完全に消滅しており、商人の介入とかつての産地仲買農家の復活で時をしのぐことになる。しかし、彼等産地仲買農家も老令のため間もなく手を引き、代って本当の意味での共同出荷組織が結成

されるのである。

昭和22年、農業協同組合法の制定に伴って福部村でも農業会の資産を引き継いで、昭和23年に農協が結成された。

しかし、組織的には未熟で事業も信用・購買のみであって、生産指導や販売事業にまで及ぶ体制は整えられなかった。

鳥取県におけるナシ生産は明治30年代から華やかに展開したが、福部村においても県内では比較的早い明治36年に導入された。多鯉ヶ池の周辺の砂丘を開拓し、果樹園を開いた佐々木基蔵（前出）がその先駆者であるが、彼の指導によって村内への普及も速く、県内でも古いナシ産地である。

昭和に入ってナシ栽培は急激に普及し、昭和9年には県下36の共同選果場が設置され、栽培面積は337haに及んだが、昭和15年598haに倍増し、第1期黄金時代を築いたのであった。

しかし第2次大戦激化と共に農業生産統制令（16年）、青果物配給統制規則（同年）などが施行され、果樹園3割減反命令が出されるに至って、ついにナシも桑と同じ運命をたどることになる。

だが、ナシは桑とは異なり、何ととっても食料であった。またナシ園は比較的傾斜地が多く、イモやカボチャなどの作付けに不適な事も幸して3割減反で済んだのであろう。

福部村海士集落にもナシ栽培農家が多いが、昭和23年海士産組合の結成と共にナシ栽培農家と計って共同作業場（選果場）を建設した。

昭和13年に、福部村漬物加工場として同集落のかつての服部小学校跡に建設されていた施設の払い下げを受け、岩戸集落の古い漁業組作業舎をもらい受けて増築した粗末なものではあったが、当地域におけるラッキョウ共同出荷施設の第1号であった。

ナシの収穫期とラッキョウは時期が全く異なり、共同使用は施設利用度の上からも極めて合理的であり、またナシ農家とラッキョウ農家とがかなり重複していたこともあって、この共同利用はごく近年まで続いていた。当初はラッキョウ共同出荷といっても各農家で個別に調整梱包したものを当施設に集荷し共販する形のもので、海士産組合の機能はこれの取りまとめと販売代金の計算くらいのものであった。

浜湯山、山湯山集落は桑の跡地に主としてモモを栽培し、山側の果樹園のナシと共に経営の主体を果樹においていたが、労働競合の点などからモモを廃してラッキョウ

ウに切り変える農家が出始め、海士より少し遅れて浜湯山にも産生産組合が結成されたが、海士ほどには組織が確立せず、シーズンに掘立小屋を建てて集出荷する程度であった。

山湯山集落には組合は組織されず、数戸の農家が炭俵に詰めた土付きラッキョウを商人に販売していたという。

この時期のラッキョウ出荷形態は多様で、各集落によっても異なり、以前からの根切りしたラッキョウの塩漬・樽詰の出荷、洗いラッキョウとしての形態及び土付きラッキョウとしての販売と極めて不統一であった。

戦後の最大の農業変革は農地改革である。

福部村にては約7割を占めていた小作農、自小作農がその恩恵に浴したのであるが、何ととっても絶対量が小さい村の耕地である。当初は農地の狭小をいうより、自作地となることで満足していたかもしれないが、資本主義経済の開放下にあつては耕地の零細さは致命的であった。

古くは当地域の農業経営規模は比較的大きく、明治・大正期には県下で上層階級の村に属していた。

だが人口と世帯の増加に伴う農地の細分化と、コメの生産技術の高度化に伴って、普通水田ではその生産力が急速に増大したにもかかわらず、当地域の低湿地水田ではそれに追従出来ず、他地域との生産力格差は開く一方であった。

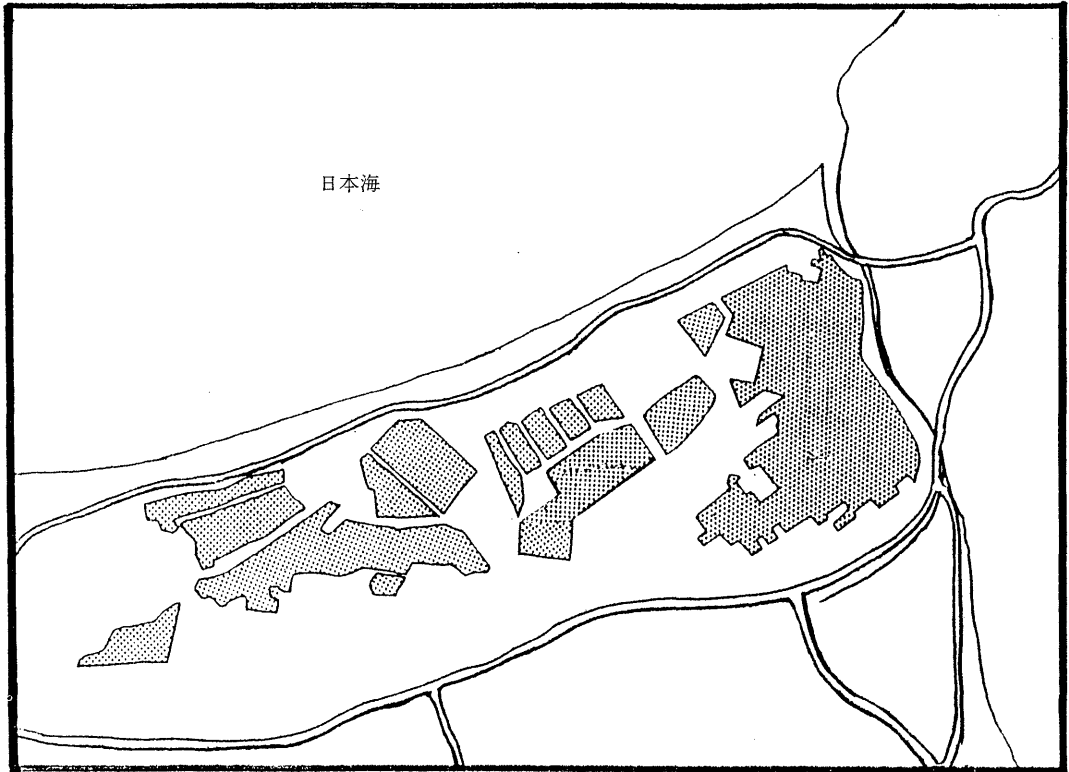
浜坂砂丘と総称される浜坂砂丘・鳥取砂丘・福部砂丘は、明治29年鳥取市に設置された陸軍第40連隊の演習場として使用されていたが、第2次大戦の終結で国有地に編入された。

福部砂丘の大部分も軍用地であったことから、砂丘畑としての耕地はごく周縁部のみに限られていて、第2図に示すように極めてわずかであった。

図は終戦の頃の土地利用状況であるが、古老からの聴き取りによるため、あるいは不正確な部分はあるかもしれないが、白地の水田面積の狭隘さと共に地域の耕地規模の零細な様子が伺える。

農業技術革新に伴って農業環境の悪条件が次々克服されるに至って、すでに平地における耕地拡張の余地がなかった当地域の砂丘地利用に寄せる願望は、沿岸漁業の不振によって岩戸漁村さえもラッキョウ栽培を試みる者が続出し始めた昭和24年頃から切実な要求となり、昭和27年ついに福部村は209haの国有地の払い下げ獲得に成功した。

おそらくその大部分が耕地化出来ようとは考えてもい



第3図 福部砂丘地域ラッキョウ畑の分布

なかったであろうが、すでに過去において農業・生活防衛のため県などとタイアップして砂防造林を実施しており、耕地開拓に対しては並々ならぬ意欲と自信を有していたことは明らかである。

村有地となった砂丘荒地は、直ちに各集落の砂防組合に配分され、本格的な農地開拓の鉄が入られることになる。

砂丘地農業は飛砂との戦いである。

砂丘の砂は、通常風速6 m/秒で巻き上げられ飛ばされる。その程度の風の吹く比率は年平均、実に60%の日数を占める。砂丘は絶えず移動するといわれるゆえんである。

したがって砂丘地の農業開拓の成否は、一に砂防造林にかかっているのである。

かつて大正6年・佐々木甚蔵・浜本四方蔵らが開拓を行った約15haの砂丘畑造成も、昭和元年の完了までに約8 haの砂防造林をその風上に完了させた事によるものであった。その報告によると黒松・ニセアカシヤ・ヤシヤブシを植林したとあり、後にはほとんどニセアカシヤ

のみであった様子であるが、せっかくの植林が飛砂で埋没し、成功率は極めて低かった。

この砂防造林に貢献したのが、原勝(1895—1981)である。原は大正13年に鳥取高等農学校教授として赴任して以来、昭和35年に鳥取大学を退官するまで砂防造林の研究に没頭し、その権威として砂丘の開拓に大きく寄与した。

戦後の混乱期を抜け出すにつれて回復し始めたラッキョウ生産は、県内の狭域市場や一部の県外市場のみでは産地内競争を生じ始め、また前述したごとく各集落によって出荷形態、規格が異なったりしたことからくる市場の混乱に対する苦情が来たりし始め、折しも農協の発展を画して事業拡張が推進されていたことから、まずこのラッキョウの統合に着手した。

農協は昭和26年、各集落の生産者に働きかけ全集落を一元化した共同出荷体制の敷設を試みたが、海士と山湯山が実質的な生産組織を確立していたにすぎない実態で他集落が追随出来ず、ラッキョウ規格の統一と販売代金の仲介程度の形式的改革に終わった。

その後、他集落の砂丘開拓の進行と共に生産・組織体勢が確立されていくに従って、ますます集落間における市場競争が顕在化し、根本的な共同出荷体制改革を迫られることになるのであるが、それはかなり後の昭和40年代にまで持ち越されることになる。

だがこの農協の介入を機に、それまで「海士ラッキョウ」として通していた銘柄を「砂丘ラッキョウ」と改め、これが後に鳥取産ラッキョウの銘柄にまで発展するのであるが、当時は上述のごとき情勢であったから、商標は砂丘ラッキョウに統一したものの各集落ラッキョウ組合の小印を入れ、もちろん代金計算は各集落単位で行っていた。

昭和27年の国有地の取得は、その後の当地域のラッキョウ産地展開に大きい影響を及ぼす。払い下げられた国有地の各農家への配分は集落によって異なり、例えば海士においては2通りの方で配分している。すなわち既存の畑地に接したかつての村有地は希望者に、国有地であった裸地は各戸均等に割当てている。浜湯山・山湯山は既存の桑畑の所有面積に比例して配分しており、地形などの格差を考慮して分散團場的に割当てた。

なお各集落への配分は勝示（ほうじ）によって行なわれたため、漁村であった岩戸には割当てが無く、所有面積の多かった海士・細川が割譲した。

これらの配分方法の違いが、後に集落によって農家の経営規模拡大のパターンが異なる結果を招き、集落間の生産力格差を生じて全地域の共同化体制の確立を遅延させることになるのである。

ラッキョウ生産新技術の萌芽

かつての軍用地に砂防造林が進み、砂の移動が抑えられるとその風下に耕地の造成が可能となる。もっともその昔、祖先が開発を試みようとしなかった場所が大部分だから、地下水位は低いいわゆる砂漠状態の耕地しか出来ない。

だが生命力の旺盛なラッキョウは、その酷しい自然環境においてさえ根付いたのである。

砂防造林の黒松とニセアカシヤの緑が増すにつれてラッキョウ畑が広がっていき、すでにかかなりの規模で生産体勢を整えていた海士以外の集落も、着実に生産農家が増加し技術水準は平準化していった。

昭和20年代末からの第2次産業の急激な成長は、わが国にとって大きな転換期であった。いわゆる農業経済国から工業経済国への息吹きが始まった時でもあるが、農業にとっても歴史的な変革期であった。

肥料化学工業の発達は施肥概念に変化を与え、農作物の多肥多収栽培が一般化し、ラッキョウも栽培面積の増加と相まって化学肥料に偏した多肥栽培に傾斜していき、昭和31年には腐敗病、ネダニの大発生を被ることになる。

この被害が福部砂丘地域全域に及んだことから、その対策と生産技術の改善を目的として翌32年、福部村ラッキョウ生産組合が誕生したのである。

またこの時代は農業の動力化の幕明けでもあった。

機械工業の発達は他産業への影響もさることながら、農業技術に大きい変化をもたらした。その最大の要因は動力耕耘機の普及であった。

当砂丘地域にも昭和37年に10台のティラーが導入されたのを端緒として、3～4年でラッキョウ生産農家のほぼ全部に普及した。

また出荷技術に対する機械化の模索が始まり、さらに高分子化学工業の著しい展開はいわゆるプラスチックフィルム類の農業への利用を推進したが、梱包材料としてもその特性を発揮し始めていた。

一般にわが国の農業の機械化は、コメ栽培に偏倚したものであった。現在でもその傾向はあるが、特殊農産物あるいは野菜類一般に関する機械化の萌芽は極めて遅れていたのである。

まして「砂地」と「ラッキョウ」の組み合わせでは押し知るべしであり、結局は生産者自らが創出・改良を企てない限り、その技術進歩は不可能なのである。

砂地では走行不能とされ、極めて遅れたティラーの導入も、当地域農家の技術改善意欲を基盤として行なわれたものであり、自らが技術確立をしない限り、産地規模拡大が不可能であることを知った上でのものであった。また昭和35年・海士共同出荷施設における洗いラッキョウの「洗浄機」の開発も、他に頼るべきものがないことを知った農民の熱意によるものであり、これがその後産地流通施設の機械化の先駆をなしたのである。

生産者の増加に伴って、農協も本格的産地形成を打ち出し、昭和38年に中京市場の開拓を始めると同時に生産基盤の確立を計り、農業構造改善事業による圃場整備、造成及びラッキョウ加工施設の建設などを推進する。だが、生産者はこの事業を必ずしも好意をもって受け止めたわけではない。それは市場開拓が思わしくなく販路に行き詰まりをみていたからであり、またこの事業によって農協の出荷統制が強化されることを恐れていたからである。

昭和40年・17haの砂丘畑造成とラッキョウ加工施設2

棟の建設を皮切りに、昭和44年度事業終了までに127haの圃場整備と34haの農地造成（別事業で海士集落は8haを自己造成している）を行って産地基盤を整えたのである。

だがこれら産地規模の拡大と経済成長の徴は、福部村においても雇用農業労働力の確保を困難にし始め、大正時代から行われていた「切り子」によるラッキョウの根切り作業に影響を及ぼす。

根切りは洗いラッキョウ調製作業の最も重要な部分で、例えば海士集落においては昭和30年頃から共同作業場において、雇用した「切り子」により生産した1部のラッキョウの調製を共同化していたが、30年代末期にはついに共同作業を廃止し、根切り作業を個別農家へ戻さざるを得なくなるのである。

このように高度経済成長の余波は、当砂丘地域のラッキョウ生産にも少なからざる影響を及ぼしたのであった。

産地基盤の確立

昭和40年代に至って、福部砂丘地域のラッキョウ栽培面積はついに100haを越す。

基本法農政の推進はラッキョウの零細産地を消滅させ、大規模産地の台頭を促した。当然、市場における産地間競争は熾烈になり、今までのように農協出荷とは名ばかりの市場対応では通用しなくなったのであった。

ここに至って、ようやく当砂丘地域ラッキョウ生産組織の実質的統一の気運が高まり、昭和42年、待望の完全共同販売体制を敷く手筈が整ったのである。ところが思わぬ伏兵があり、結局は1集落を除いて共販体制をとらざるを得なくなり、完全共販体制は翌年に持ち越されることになる。

その問題点とは、ラッキョウの連作障害に関するものであった。

海士をはじめ、古くから栽培していた土地のラッキョウが純白に洗い上らず、後発集落の岩戸のラッキョウと較べてかなり品質格差を生じ、市場評価に差があったのである。

かつて昭和26年・農協が企てた系統出荷一元化を阻み名目的な共同出荷体制に終わったのは、先駆集落と後発集落の格差意識に基づく前者の優越によるものであった。ところが、今度は最も後発した地域の合意が得られなかったのである。この品質格差は明らかに連作に関わる変異であった。

連作障害はすでに多発の徴を見せ、昭和40年のネギハ

モグリバエの大発生による80haに及ぶ被害、翌年の腐敗病（後に白色疫病と判明）、翌々年にはラッキョウ黄化現象（亜鉛欠乏症と判明）、さらに昭和46年頃からの乾腐病と、次々障害が発生したのである。

これまではラッキョウ栽培において薬撤防除など考えもしないことであったが、ここに至ってついにラッキョウの防除体系を立てる必要に迫られ、種子の段階から地拵え、植付段階及び生育中の管理段階へとわたる薬剤防除が実施され始め、昭和40年代にはラッキョウの一貫防除体制を確立したのである。

農業構造改善事業による農道の整備と圃場整備は、かつて不可能であった砂丘畑の動力機械化を推進し、昭和40年頃にはほとんどの農家にティラーが導入されたのである。

ティラー導入は、かつての畜力・人力体系の栽培技術に大きい変化をもたらした。

その最も大きい技術革新は掘取り作業の機械化であった。まだ不完全なものであったとはいえ、炎天下の重労働とくに実質的作業主体であった婦人の重労働をかなり軽減することに成功したのである。

この自ら勝ち取った技術革新は地域農民に大いなる自信と希望を与え、この期に創出、改良された技術は十指に余り、例えばティラーの性能発揮に不可欠な砂地用スパイク車輪の創出、掘取作業における根群切断用の牽引刃の開発、さらにその頂点をなしたティラー用牽引式ラッキョウ掘取機、そして産地流通技術におけるラッキョウ洗浄機、選別機等の改良など、これらの大部分が生産農家自らの情熱で誕生したものである。

これらの気運に乗って労働対象である砂丘畑の基盤整備が計画され、昭和48年に県営・団体営による砂丘畑灌漑施設の敷設が開始された。

無灌漑作物としての特性ゆえに砂丘に導入されたラッキョウではあるが、その後の鳥取大学農学部附属砂丘利用研究施設での研究で灌漑による増収効果が確認され、極めて有効な実地技術として当地域に受け入れられたのである。

これらのさまざまな成果が来るべき主産地段階への布石となるのである。

総 括

一般に農産物の産地展開は次のような指標に基づいて規定できる。

- ①当該農産物生産農家の数とまとまり
- ②基幹生産部門への当該農産物の関わり

③産地銘柄の形成度

④生産・流通段階における機能的組織の形成

これらの指標の達成・充実度合がその産地の発展段階を示すわけであるが、いま当砂丘地域におけるラッキョウ生産をみると、まさにこれらすべての指標を満足していることを知る。

生産農家は300戸を越え、全村の過半を占めると共に栽培面積は160haに及び、しかも砂丘地という自然的立地条件に限定されることから、完全なる集団栽培地域を形成している。

また集落立地により差はあるものの、ラッキョウを基幹生産部門とするナシ又はコメとの複合型又は準単一複合型経営農家の安定的な生産構造に支えられ、共同出荷体制に基づく出荷量と品質管理は市場信用を高め、砂丘ラッキョウの銘柄を確立している。

生産・流通に関わる組織としては、既述したごとく連作障害の頻発を契機に結成され、以後産地規模の拡大に伴ってさまざまな技術革新を模索する意欲的活動を行って充実させてきた。

栽培規模の拡大はこれまでの単なる動力機械化では対応しきれなくなり、高度機械化段階へと移行する。

昭和50年・4輪駆動型トラクターが国内生産・販売されるや否や、当地域に一举に導入される。例えば、昭和49年末には当地域にわずかに4～5台しかなかったトラクターが昭和55年には実に1農家平均0.5台、153台に増加したのである。

これは単に、4輪駆動型ゆえに砂丘畑での利用が可能となったことのみによるものではなく、機械化への模索の中から農民自らが創出・実用化したさまざまな新技術に裏付けられたものであった。

例えば昭和54年に開発されたトラクター用ラッキョウ掘取機は、かつての8倍を越す性能を発揮し、その他2連犁による深耕、トラクターによる土壤消毒、植付時の作条機などの栽培技術の創出・改善に支えられ、驚くべき速さでトラクター作業体系を作り上げていったのである。

もちろん農民の模索から進める技術であり、必ずしも合理的の体系が確立された訳ではない。例えば植付作業は依然人力段階の技術に取り残こされており、また管理・防除作業もトラクター利用にまで至ってはいない。

しかし、トラクター一貫生産技術体系が確立されることは極めて間近かであろうことを想像させる状況にある。

また、産地の重要な機能である流通技術の展開も目覚

しく、洗いラッキョウの重要な基本工程である根切り調製作業は依然人手によっているものの、その後につづく調整加工工程はすべて機械化されている。

洗浄から選別、さらに芽止め、計量、梱包に至るすべての工程が機械化され自動化されているが、これらの技術の大部分が当地域や福井県三国地方のラッキョウ産地において創出・改良されたものなのである。

これらの新技術は当然のことながら、規模の経済原理に基づく技術であり、これらを軸に組織の結束は極めて強いものとなっている。

砂丘ラッキョウは、市場においては鹿児島県に次ぐ量産県として位置付けられているが、その6割を当砂丘地域で生産しており、1市町村単位の産地としてはおそらく全国にその例を見ないであろう。

だが、産地の展開に伴ってさまざまな問題がじゃっ起されている。

既述した連作障害もその1つであるが、産地流通体制にも問題がある。

現在は共同出荷とされてはいるものの、完全共選共販体制ではなく、当地域5集落別にそれぞれ共選出荷体制を敷いている。

当然組織内容によって技術較差を生じ、集落間の商品のムラは防ぎようがない。産地流通における品質管理は銘柄形成・確立・維持にとっては絶対的なものである。

今のところは各集落別に仕向市場をかえて品質のバラつきを糊塗しているが、いずれ問題化してくるであろう。

これに対して昭和50年ごろ共同加工施設統合の話が出たものの、加工施設の設置場所、処理能力と雇用労働力及び処理用水などの問題から不発に終り、昭和53年ごろからの各集落共同加工施設の更新・新築などにより、ますます統合が困難となって現在に至っている。

いまひとつは、洗いラッキョウの需要傾向の問題である。

現在、砂丘ラッキョウの出荷市場は極めて狭い範囲に限られており、したがって洗いラッキョウに対する固定的需要が確立していることから、当地域の洗いラッキョウ供給量は比較的順調に伸びてはいる。しかし、労働力問題及び耕地規模関係から今後の成長は期待出来ず、さらに近年の洗いラッキョウと土付ラッキョウの価格差の接近は、実質的には洗いラッキョウの収益性が劣る状況を呈しており、産地としての方向を検討せざるを得ない時期に来ている。

これらさまざまな問題を乗り切ることによって、始め

て当地域が永続的なラッキョウ主産地として君臨できるであろう。

文 献

- 1) 中国・四国農政局鳥取統計情報事務所鳥取出張所：福部らっきょう。同出張所，鳥取（1981）p. 1
- 2) 藤井嘉儀：ラッキョウの伝来と普及。鳥大農研報，本誌
- 3) 藤井嘉儀：福部村におけるラッキョウ生産の推移。鳥大農研報36 pp. 110-125, (1984)
- 4) 福部村誌編さん委員会：福部村誌。福部村，鳥取（1981）p. 419
- 5) 前掲書，p. 419
- 6) 前掲書，p. 419 他に聴取り調査
- 7) 前掲書，p. 420
- 8) 前掲書，p. 420 （原資料紛失）
- 9) 福井県坂井郡浜四郷村：浜四郷村誌。浜四郷村役場，福井県（1956），p. 747
- 10) 服部小学校編：服部村郷土史。服部小学校，鳥取（1916）
- 11) 平田眠翁：因伯産物薬効録。雄松堂書店，東京（1982）p. 108
- 12) 川上一郎：ラッキョウー利用にあわせた作り方一。農文協，東京（1973），p. 12
- 13) 鳥取県：鳥取のらっきょう作経営。鳥取県，鳥取（1970），p. 3
- 14) 鳥取県農林部：鳥取の砂地農業 1963。鳥取県，鳥取（1963），p. 6